熱量 1枚の絵画が放つ LOVE STORY

第3章 白い砂漠

YUKI との出逢い

　1997 年、香港が英国から中国に返還された。10 年経って徐々に香港の中国化が顕著になる。　金融業は返還後の変革を見据えて、ロンドンに拠点を移した。
社会主義色の強い中国化を恐れ、欧米と肩を並べていた香港のカルチャーやエンターテイメントは台湾、シンガポール、カナダへ移った。

　日本市場の拡張を狙うシンガポールエアラインの仕事で凛子は YUKI と出逢う。
ミステリアス＆エキゾティックなアジアの魅力を発信しようと
「オリエンタルミステリー」をコンセプトにあらゆる媒体を占有する戦略だ。
香港から来日するチームと合流し、日本の都市を撮影。
コーディネーターとして、奏子、凛子が同行する。
目的は洗練された東京・古の都・京都、エキゾティックな大阪それぞれの魅力を撮影する。
ロケハンを兼ねての撮影スケジュールは 1 カ月、京都の紅葉に合わせて組まれている。

凛子はフレキシブルで外国人ならではのゆとりも考えたスケジュールを半年ほどかけて組む。
香港とロンドンからそれぞれ撮影クルーが到着。
リーダーは神秘的なアジアを欧米に浸透させた若き写真家 YUKI、ディレクターの DONE でスタッフ総勢 20 名だ。

「RINKO さん、このスケジュールはあなたが組んだの。」
「はい。何か問題がありましたか。」
「いや、さすが JAPANESE。違和感や拘束感がなく快適なタイムテーブルに驚いている。」
「ありがとうございます。希望があれば何なりと。」
低いトーンの声、ブリティッシュイングリッシュ。真っ黒い瞳に細い鼻筋、美形だ。
いまブレイク中の中国人俳優陣のトップ 10 ばりの容姿に全身熱くなる。

「RINKO さん、アジアンな魅力だね。ボーダレスというのか。よく聞く日本人タイプではないね。」
「そうですか。確かに中国系の血は入っています。」
「俺は英語がラクだからこのままで。さっき香港のスタッフと広東語で話していたから。
携帯番号教えて。これが俺の番号。」

「YUKI のナンバーをゲットできるなんてすごいよ、凛子。」
「そうなの？モテモテの奏子さんが羨ましがるなんて。」

早速翌日凛子の携帯が鳴る。YUKI からだ。
「花火が観たい。」

「YUKI さん？早速手配します。人数は。」
「RINKO さんと。」
ディズニーランドの花火と高層ビルの夜景が美しい東京湾クルーズを手配する。
ついでに羽田空港から京浜工業地帯のコースを加える。
まるで宝石を散りばめたような輝きと、幻想的に浮かび上がる工場のシルエットがこの世のものとは思えないだろう。
「RINKO、素晴らしい。まるで黄泉の世界だ。」
YUKI はシャッターを押し続ける。
エンジン音と水飛沫、水面に映る夜景、夜空を彩る万華鏡の世界。
そして白いシャツをなびかせ軽快にシャッターを押す YUKI。
恋の予感がした。

@NAGASAKI

　予定通りの帰国前夜、DONE から奏子に
「長崎に行きたい。YUKI とスタッフ５名でぜひお願いします。」とのリクエストが。
「長崎は凛子の出身地ですよ。地元では有名なファミリーです。」
「それはラッキーだね。」
傍らから凛子が叫ぶ。
「いえいえ、ただ歴史があるだけです。」

　凛子は兄の翔に連絡する。
「翔、凛子。アテンドしている制作チームが長崎観光を希望しているの。撮影したいからロケバスも借りたいし・・・。」
「ホテルと中華街は押さえておく。ロケハンのコースは。」
「長崎の夜景ははずせない。東洋の神秘がキーワード。」
「了解。到着時刻を教えて。迎えを用意するから。」
「ありがとう。さすがインターな長崎人、頼れる兄貴。お世話になります。」

　長崎は坂が多い地形のおかげで、水面が輝く港を見下ろすポイントは観光名所だ。
「造船所が美しく照らされる夜景は素晴らしい。」
「世界三大夜景の一つで、１万ドルの夜景と言われます。すり鉢状の地形が生み出す絶景です。
ホテルから昼夜長崎の景色が一望できます。」
美しい夜景や異国情緒漂う街並みを夢中で撮影する YUKI。凛子は漆黒の瞳に映る夜景に見惚れる。彼こそミステリアスだ。

長崎５日間の滞在を終えて明日香港へ帰国する。
「中華街で広東料理をぜひ。長崎流もなかなかですよ。」　一行は長崎の中華街「翠月楼」で最後の晩餐だ。
「食は広州にあり。」の言い伝え通り、広東料理は実に種類が多く飲茶は楽しい。
「本場広州はもちろん、香港や台湾の広東料理とは趣が異なり独自の味がある。この油淋鶏は醤油の香りが品良く箸が進む。」
「ありがとうございます。広東料理はその土地で味を育むともいわれます。またこちらにいらした際はお立ち寄りください。わたしの実家です。」
「次回は香港、台北で仕事をしましょう。連絡します。」

出国の朝、ホテルのクリーニングサービスから 10 着のブラウスが届く。
すべてが白く光沢のある YUKI のオーダー。微細に濃淡がありシルエットもそれぞれだ。
いつも彼が被写体より光っていたのは白い生地の反射だろうか。揺れるブラウスがまるで波模様を描く白い砂漠のようだった。

香港か台湾での再会に心が躍る。

期限付きの恋が終わるとき

　２か月後、チャイナエアラインの仕事で台湾に渡ることになる。

台湾を皮切りに、シンガポール、上海、バンコク、香港、ソウルと仕事。
当然 YUKI とはチームだ。

台湾の仕事で YUKI に告白された。
それから各国で共に仕事をしてきた。
ON/OFF ずっといっしょに過ごした。
休みに入ると長崎へ一緒に帰省した。
インターナショナルな YUKI との生活は公私ともに充実していた。
そして２年が経ち、互いに生涯のパートナーと認め合い、周囲にも公認だった。

長崎の稲佐山の夜景・・・・・・
彼は右足を一歩下げて、片膝をつく。
そして掌に一組の指輪をのせて差し出した。
「Please Marry me.」
「Yes, I love you」
ピンクゴールドのスクエアリングがお互いの薬指に光っている。
本当に夢のように素晴らしい出来事だった。

６か月後のシンガポール・・・
あの日にふたりのすべてが崩壊した・・・・・・。

オフィスに YUKI との子供を連れた女性が訪ねてきたのだ。
仕事仲間として数年間交際し、やがてすれ違いの生活に疲れた彼女は去っていったという。
そして別れた後に妊娠に気づきそのまま出産し、２歳の男児を連れて YUKI に会いに来たらしい。
凛子は二人の会話を偶然に聞いてしまった。
頭が真っ白になるってこういうことか・・・・そしてその場を去った。
詳しいことは知りたくもなく、そこで終わった。

日本で出会ってから２年・・・素晴らしく愛情に満ち足りた日々、それで十分だ。
あの日のリングは彼のデスクに置いた。
しばらくは白いシャツを着ることもない。
携帯から彼の番号も消えた。
数日後、凛子は帰国した。

携帯も替えて、YUKI 関連の仕事も一切辞めた。
もう会うこともないし、会いたいとも思わない。
彼の話を聞くこともない。
あまりにも現実から離れた出来事だと、まるで夢のようで時間の経過とともに何もなかったと振り切る自分がいる。
悔しい、悲しいと嘆くより、一瞬で奈落の底に突き落とされると、記憶から抹消されることを知る。

YUKI は凛子を必死で追いかける。
いまさら言い訳が通用するとも思えないが、もう一度凛子と話したい。
「奏子、凛子はどこにいるの？」
「YUKI にいろいろと事情があるのは理解できる。ただ自分には受け止められないので終わりにする。
と伝えて欲しいって。」
「せっかくプロポーズしたのに。」
「別れた後に子供を産むという選択は理解できるけど、その子供を連れて会いに来るのは復縁したいからでしょ。凛子はもちろん、誰もそんな事実を受けとめることなんてできない。」
「もう会えないのか・・・・。辛すぎる。」
「会いたくないでしょ。」
「・・・・・・・。」

「凛子、YUKI から連絡あったよ。伝言したからね。」
「ありがとう。なんか数日ですっきりした。こんな程度だったのかね。」

仕事が繋いだ恋・・・・
瞬く間に終わった恋・・・・
ぎゅっと凝縮された恋・・・・
しばらくは仕事から離れるのもいいかもしれない。

読者が選ぶ、推しフレーズ

読者お気に入りのボーダレスなロマンティックシーンをセレクトしました。

RINKO、素晴らしい。まるで黄泉の世界だ。
YUKI はシャッターを押し続ける。
エンジン音と水飛沫、水面に映る夜景、夜空を彩る万華鏡の世界。
そして白いシャツをなびかせ軽快にシャッターを押す YUKI。
恋の予感がした。

仕事が繋いだ恋・・・・
瞬く間に終わった恋・・・・
ぎゅっと凝縮された恋・・・・
しばらくは仕事から離れるのもいいかもしれない。